

〔書評〕

上田 博著 『昭和史の正宗白鳥』

——自由主義の水脈——

中山 和 子

上田博氏は今日の啄木研究の第一線を担う研究者として著名である。

そういう専門家がいま、なぜ正宗白鳥なのか、と疑問に思う向きがあるかも知れない。しかし、上田氏の近年の足跡を少し注意してふりかえるなら、疑問は解消するはずである。

周知のとおり、啄木「時代閉塞の現状」のなかには、「必要」というキイワードがある。「必要は最も確実な理想」であり、われらは「明日の必要」を発見しなくてはならぬ、と啄木は説いた。若き日の中野重治が「必然」と読み解いてしまった啄木の「必要」の概念は、当時の哲学者田中王堂のプラグマティズムの影響である、と始めて明らかに扱えたのは上田氏であった。水脈はじつはこのあたりに発していたと思われる。

『昭和史の正宗白鳥』の出現に、私は驚かされはしなかつたけれど、前著『石橋湛山』（三一書房・一九九一・一一）を手にしたときは、さすがにエーッと驚いたのである。しかし、考えてみれば驚くほうがよほど迂闊なのであった。そもそも田中王堂とは、

湛山が「初めて人生を見る目を開かれた」その人だった。湛山の自由主義に深く魅せられ、「現実に入入る思考の生命力」に刺激されながら、ついに湛山は「単なる研究の対象ではない。私自身の生きる進路である」とまで上田氏は傾倒した。これは異例なことである。ひとつには湛山という人が一般に政治家、経済評論家として高名であること。又ひとつには「生きる進路」というような真率な言葉が表明されたことにおいてである。

しかし、上田氏の面目はまさによくそこに示されているといふべきであろう。『昭和史の正宗白鳥——自由主義の水脈』もまた、この延長上に稔った果実である。

この書のとがきに代えられた「混沌の現代に思うこと」という文章は、のっけから気鋭の経済評論家、佐高信『会社は誰のものか』の引用が出てくる。「ベルリンの壁は破壊されたが、日本の会社主義の壁は少しも揺らいではない」と。「社会主義」と「会社主義」の現状を重ねて切った論である。

近代文学研究者のなかで、佐高信を読む人は多くないであろう。

むしろほとんどが、名前さえ知らないのが実情ではなからうか。佐高信の本が自然に守備範囲に入るところに、上田氏が難なく湛山の業績に分け入り、その文芸、社会評論を取扱って、文芸史に新領域を開くような素地がある、とあらためて気づかされる。しかし、そういう稀な素地の素地がどこにあるのか、じつは上田氏の真率はそれも明してくれるのである。

私は昭和三十一年に中学を卒業し、大阪のある大手電器メーカーに工員として勤めたのであるが、工場幹部からことあることに、「わが社は単に家庭電化製品を作っているのではなく、人を作っている」と聞かされ、毎朝礼時に創業者の「社訓」を斉唱して一日の仕事がスタートした。

私はこの一節を目にして強い感銘を受けた。篤実な啄木研究者の上田氏に、こういう個人史のあることを知らなかったのである。少年期の労働体験がどういうものか、貧しい私の体験から推しても、その労働の現場で、柔かい感性に刻みこまれたものは、文学プロパーに収まりきらぬ何ものかを育てる。上田氏のもつ思考の弾力、巾広い視野、社会現実と切り結ぶ意力はそこにおいてたくわえられたものにちがいない。さらに、創業者の「社訓」斉唱といった特有の全体主義的人間管理の下にあったことが大きい。かつての「聖戦」貫徹スローガンは、そのまま「社訓」の象徴する戦後産業社会のエートスのなかに一貫している、そういう確認

の道筋のなから、上田氏の熱い「自由」への仰望は生まれたのである。

自由人湛山に注がれた視線のなかに、すでに白鳥の影はさしていたが、いま、わたしたちは、従来の自然主義文学者白鳥のイメージを、リベラリズムの側面から一新してみせる一本を、手にする喜びを得たのである。

本書の構成は次のようである。

- 序章 白鳥の手紙―信仰・文学・政治・戦争―
 - 第一章 作家白鳥は沈黙していたか
 - 第二章 白鳥の心境・「西園寺公の心境」
 - 第三章 老社会主義者の面影
 - 第四章 オールド・リベラリストへの親愛
 - 第五章 相も変わらぬへ英雄崇拜
 - 第六章 白鳥のへ恐妻病
 - 第七章 自由人の条件―白鳥の成熟する場所―
 - 第八章 白鳥と荷風―日露戦後の知識人―
- 年譜

右のうち白鳥の手紙を中心に、その戦争嫌悪、言論圧迫の不快、自由渴望など総括的に論じた序章と、太平洋戦争下の文学生活態度の評論を問題とした第一章とが、私の現在の関心からもっとも興味深い文章であった。第二、第三、第四章はそれぞれ元老西園寺公望、社会主義者河上肇、新聞人馬場恒吾の人物像を主としながら、それらをバックに白鳥が浮きあがる仕組になっている。

よく案配されたエピソードはじめ、知らないでいた事象もたくさんあり愉しんで読んだが、白鳥の「英雄崇拜」や「恐妻病」を扱う第五、六章その他、多少の異論がないではなかった。

自由人としての白鳥を成り立たせる根拠はいったどこにあったのであろうか。

白鳥はその臨終においてキリストに罪を悔いアーメンと唱和した。植村環がそう記したことによって、白鳥の信仰問題がさまざまに論議されたことがあった。しかし、今日それが事実と相違することは遺族の証言に明らかである。発表された夫人の日誌からは白鳥の次のような言葉が削られていた。「植村環は善良な人だがチャラッポコをいう。わしはすべてを捨ててキリストにつくほどの大量ある人間ではない」(田辺園子『女の夢 男の夢』作品社一九九二・一〇)

白鳥は最終的にキリスト教からも自由であろうとしたようである。にもかかわらず、若い白鳥に日本的エイトスの外部を、決定的に教えたのはキリスト教ではなかったらうか。白鳥にあって他の自然主義作家にはない異質なりベラリズムは、ひとつには白鳥の存在の不安に発した青年期キリスト教にあるように私は思う。上田氏の意見をさらに聞きたいところである。もうひとつは白鳥がジャーナリズムの畠を歩いたことによるだろう。それは今回の上田氏の筆でいっそう明瞭になった。白鳥はたとえば「二七会」のメンバーとして、清沢冽をはじめとする日本の上層の優秀なりベラリスト国際通と、親しく接触する幸運に恵まれていたのであ

る。

ところで、戦争下の食糧難時代の白鳥は「無知な農夫や労働者が、高い闇相場の金をとって、しかも王者のように威張り通す」有様を呪っている。白鳥の時局にさめたりベラリズムも、生きものとしての平等感覚を欠いた、知識人上層の特権的意識をぬぐうものではなかったようである。(このことも上田氏にたずねてみたい。)

そしてこれは、一見わかりにくい白鳥の「英雄崇拜」と連らなる構造でもあるはずである。小説「一種の大臣病」には「人間の本性は事大主義なのである」というメッセージを読みうる、と私は思うが、そういう突き放しかたに、白鳥の人間観察の卓抜な冷眼はある、といえるのではないか。

「嫌いな女」をたずねられた白鳥は「醜い女、生意気な女、世帯持ちの悪い女、虚栄心の強い女、嫉妬深い女、出しゃばりな女」「婦人の自覚など何だのと六ヶ数議論を書いたり口にしたりする女」(『婦人公論』大正七・一〇)だと答ええたらしい。大正中期といえば『青鞥』以降さまざまに活躍している、新しい女々たちはむろん、都市化現象にともない進出しはじめた職業女性やモダンガールたちの目からみても、いかにも古風な女性嗜好ではなかったか。リベラルな男の本音を敢て公言するところに白鳥のシニズムがある、といえはよいのか。なるほど一見、節約勤勉の「良妻賢母」のなかに「女に化けた蜘蛛」のしたたかな正体を見あらわす白鳥は、そのかぎり「良妻賢母」などという旧道徳の欺瞞を

はがしてみせる人でもある。しかし、「蜘蛛」であらざるを得ない現実の女の境遇に立って、白鳥は一度でも真剣に考えたことがあったろうか。白鳥の「女性恐怖」が少年期の原体験にあるらしいことは理解できるが、その自然延長上に「女大学」的女性願望が示されるとき、そこに白鳥における個人意識、リベラリズムのある未成熟、平等感覚の欠如を感じざるをえないのである。

上田氏の論点はこうしたところにはなく、時代情況に柔軟な抵抗を示す自由人白鳥を評価するところにある。若き日のマルクス主義者たちがスターリニズムへと、二十世紀の生み出した奇怪な現象、いわゆる「全体主義的現象」にはまりこんで行ったのに対し、作家白鳥の存在のしかたがどのようなものであったか、その洗い出しに上田氏の主眼はあるようだ。そして、上田氏の語るリベラリスト白鳥は、その人的交流と人物像の対比とのなかで生彩をおびているし、たとえば「白鳥とスポーツ」の項のように、相撲帰りにスリにあう白鳥の話から、老自由主義者馬場恒吾の「フランスの敗因」や、小松清の欧州戦争ルポ「パリ通信」を引き出し、同じ文脈で読みといていく、というような自在で巾広い視点が、本書の醍醐味である。

戦時下の軽井沢の「高原短信」にこめられた思いと、その屈折の読みとりにも共感するところが多かった。できることなら、この時期の白鳥の、皮肉と反語にみちた発言に網羅的に当ることによって、たとえば「こういうことを書くまい、口走るまいとする強い意志力をノンシャランな韜晦味ある文章の底に沈めている、

至芸に近い文体」(松本鶴雄「大戦・軽井沢・白鳥」『昭和文学研究』一九八五・二二)のような詳細な検討結果に何らかのコメントがあってもよかったように思う。

(なかやま・かずこ 明治大学文学部教授)